
碧眼のソラ

凜として華の如く

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

碧眼のソラ

【Nコード】

N0599J

【作者名】

凜として華の如く

【あらすじ】

普通の高校生、夢月 空。

ソラがある追手から少女を救った事によって、全ての物語が始まった。

エピソード

…午前7時40分、金曜日。

ドタバタドタバタと階段を上がってくる音がする。

ボタン！と大きな音をたて、ドアは開いた。

「こら、いつまで寝てんの！？今日は終業式、特に遅刻しちゃダメでしょ！」

布団を無理やりはがされ、俺の姿があらわとなった。

「は…だるいな」

俺は重たい体をゆっくりと起こし、軽くのびをした。

「ちんたらしてないで、さっさとご飯食べて着替えて学校に行きなさい！」

さつきから怒鳴っているのは俺の母親。

俺は母親が苦手だった、なぜかって、それは毎日俺の事を怒るから。

「はいはい、わかったよ母さん」

「はいは一回！」

俺は高校1年生。

ぐーたらしてるように見られるけど、結構真面目だと自分では思っている。

ご飯を食べていると、TVでニュースが流れていた。

「深夜2時ごろ、。。。アパートが何者かに放火された模様で――

――

俺はうつかり、口を動かさず見入っていた。

「この辺じゃないの！物騒ねえ」

「放火にしては、随分と…なんていうか、炎が強かったみたいだね」
TV画面に映っていたのは、アパート一帯がほとんど焼け野原になっている全貌ぜんぼうだった。

「――って、もうすぐ8時よ！早く着替えて学校に行きなさい

「！」

「やっべ！行ってきました！」

学校に向かっている途中に、いきなり肩を叩かれた。

「いつて、誰だこの…って、ユーヤ！」

藤原裕也…俺の学校一のやんちゃ野郎。

俺とは小学からの付き合いで、こいつはなんだかんだで根は良い奴だ。

「よっ、ソラ！いよいよ今日は終業式だな！へへ、1年過ぎるのっではえーな」

俺の名前は夢月^{むつき} 空^{そら}…かなり変わった名前って言われる。

「せーせーするよ。やっとい休みできるって感じでさ」

「へへ、ソラらしいけどさ。いつも休みて感じしてんじゃん」

「失敬な！…って、そうだな。平和でいいってことだよ」

さっきから思っていたが、どうにも警官が多くいた。

「何か事件でもあったか？このへん…」

「ソラ見てなかったのか？アパートが放火された事件、あれで警戒してんじゃね？」

「あー…それなら見たよ。凄く焼け野原だったな」

「ただの放火であそこまでいくんだな、すっげー怖い！」

ぐだぐだ話をしていると、すぐに学校についた。

「そだ、終業式終わったらゲーセン行かね？この前すっげー可愛い娘いてさ！」

「ははは、暇だしいいけどな」

——終業式の途中の出来事だった。

校長先生が前で話している時、高く大きな爆発音が校舎全体に響いた。

「なんだ！？」

「やだ、爆発!？」

生徒が動揺しだし、一人の先生が様子を見に行った。

…今でも覚えている。

儚げに揺れる黄色の髪、切なさを物語るような黄色の瞳、天使のような白き衣。

終業式の日、それが俺と彼女の初めての出会いだった。

第一話 黄昏

校舎は八割崩壊し、先程までいた体育館までもが爆発していた。更に追撃するかのように、高い爆発音が鳴り響く。

とうとう先生までもが各個人で逃げ出し、生徒達もそれぞれ散っていくように逃げた。

「何が起きてんのかわかんねーけど、早く逃げっぞ！」

他の生徒も先生も全員逃げているのに、裕也だけが俺の側に残っていた。

「ソラ、どこ見てんだ！？ここは危ないって——」

「何が起きてんのか分からないからこそ気になるじゃん。このまま下がれないよ」

ダイナマイトなんて生温い火力じゃない事は確かだった。

人間が起こせるものとは思えなくて、どうしても気になった。

「おいおい…死んだら終わりじゃん。って言っても…無駄か」

「まあ…死なない程度に何が起きてるか見てくるよ！ユーヤは逃げててくれよ！」

俺は爆発音がしたほうへ走っていった、がすぐにユーヤに肩を掴まれて止められた。

「ユーヤ…！」

「一人で行かせて、死なれでもしたら後悔すっからさ！」

その時更に爆発音が鳴り響いた、音の大きさからすぐ側で起きたことが分かった。

音がしたほうを見ると、一人の少女と野獣のような男がいた。

「うほー！…美女と野獣ってああいう事を言うんだろうな」

「腐敗臭……？」

少女は手に純白の刀を。野獣はゴリラのような姿をしていた。

少女が刀を逆手に翳すと、眩い閃光がはしった。

「…これ伏せたほうがよくね？」

「そう思うなら早く伏せろ！」

伏せたと同時に、また爆発音がはしった。顔を上げると、地面が割れ、校舎が完全に吹き飛んでいる光景を目にした。

「——これ夢か？」

そう聞かれ、俺は頬をつねり言った。

「残念ながら現実だ」

それから何度も破壊の繰り返しが続いた。

その間俺と裕也はほとんど身動きができなかった。

現実離れた状況に、動揺を隠しきることなどできなかった。

しばらくし、少女は野獣の手に捕まった。

野獣は高々と雄叫びをあげ、歯をむき出しにしてニヤリと笑った。

少女は苦痛そうな表情を浮かべていた。

その表情を見て、俺は決意した。助けなければいけないと思った。

「ユーヤ、お前って…強い？」

「まさかソラ、俺に戦わせる気か！？無理無理無理無理怖い！」

「少し気を引くことでいいんだよ、頼む！俺が合図をしたら——」

「」

説明すると、裕也はなんとか納得してくれた。

俺はこっそりと野獣の後ろまで移動した。

俺は裕也に向けて片目を閉じ合図をした。

それとほぼ同時に、野獣に小さなガレキの石が当たった。

「あゝあああゝ！？」

野獣が少し振り向いた。

振り向く時、足は少し開く。

その瞬間を狙って俺は野獣の股間周辺を全力で蹴った。

「うゝおゝおおゝあああゝ！！」

野獣は痛みの余りか、少女を握っていた手を離した。

「よし！」

俺は少女を抱きかかえ、すぐさま逃げようとした。

しかし少女が少し苦しそうに指をさした。

さした方向には、純白の刀が落ちていた。

「ユーヤ、それ頼む！」

「分かったから先逃げとけて！」

俺は自分の家に向かって走り出した。

「…あなたはだれ？」

少女はただ、その言葉を発したつきり黙っていた。

自分の家に玄関から入ると、家族に見つかってしまう。

2階に行く為に昔から倉庫に隠しておいたハシゴを出したと同時に

裕也が刀を持ってきた。

「とりあえず俺は一旦家に帰るから、話はまた後で聞く！」

裕也はそう言い残し、すぐさま帰っていった。

自分の部屋に入った俺は、溜め息をこぼしそつとベッドに座った。

「えつと…君はどこから来たの？あ、名前も」

「…この世界とは違う世界から。名前は無い」

俺は何を言っているのか分からなくて、思わず何を言えいいかわからなかった。

第二話 ブレイブハンター

「名前が…無い？」

おそるおそる聞き返すと少女はこくりと頷いた。^{うなず}

「名前が無いって、どういう事？」

「その通りの意味。…私はブレイブハンターだから」

「ブレイブハンター？…：勇敢な狩人？勇氣…ん」

少女は俺が良く理解できていないのを悟ったのか、少し溜め息混じりで話をしてくれた。

「私は惑星アスガルドからこの地球にきたの、ブレイブハンターは…：そうね」

「勇敢な狩人といった訳し方でも正しいけど、地球以外の惑星では‘勇者’という意味だけでとられているの」

少し混沌とした表情の俺を見て、少女は少し間をあけて言った。

「宇宙一平和な惑星…：それが地球。地球を護る為に世界各国に幾数ブレイブハンターがおくられた」

「えっと…：地球を護るって、何から？」

そう言くと少女は意味深に目を閉じた。

「世界最悪の惑星ベルガモット。その惑星内には数々の極悪犯…：宇宙中を支配しようとしている者たちが沢山いるの」

「さっきの男は…：野獣’デキムス’といって、地球を支配する為に惑星ベルガモットからやってきたある組織の幹部。不意に捕まってしまったところを貴方に助けて貰って…：礼を言っわ」

話が唐突すぎた。夢物語みたいで。

理解するのには時間がかかった。今でも理解しきっているわけではないけれど。

「…ブレイブハンターっていうのは、その…：惑星アスガルドにいる、地球という警官みたいなものってこと？」

「そういうこと。惑星ベルガモットを支配している‘魔王’に宇宙を支配されるわけにはいかないの」

「…惑星アスガルドと地球以外は、ほとんどが占拠されてしまったけど」

「ブレイブハンターだからっていったけど、ブレイブハンターは皆名前がないってことなのか？」

そう聞くと少女は少し躊躇^{ためら}いながらも答えた。

「……ブレイブハンターは本来、過去の経歴を捨て、一切の人間関係を断ち切ることからがスタートなの」

「…私は父母が‘ブレイブハンター’だった’から、まだ幼いけどブレイブハンターになったの」

その言葉を聞いてすぐにしまったと後悔したが、当然遅かった。

「通り名っていろいろはあるけどね。皆がみんな、ブレイブハンターって名称だと困るから」

少女は何を悟ったのか、話をそらすようにそう言った。

「通り名…皆がそう呼ぶ名か。なんていうの？」

「…花鳥風月。それだと呼び辛いから、ラルって呼ばれるわ」

「花鳥風月…ラル。なるほどね。俺は夢月。あ、ソラって呼んでくれ」

ラルは微笑しながら頷いた。

「——ああ、そうだ。その刀って…」

「これは白刀・雪月花。世界最高の鍛冶師‘カルマ’が20年かけてつくったっていう名刀なの」

それが誰かは勿論わからないが、20年かけてつくる刀なんて信じられないほどだった。

「沢山の魔力…自然の力が込められているの。使い方によっては惑星一つ潰せる刀」

「！そういえば、あの…その、技っていうのかな…閃光がはしかったと思ったら、ドドーンって…」

表現が下手なことに呆れたように溜め息をつかれた。

「自然の力と自身の精神力を調和させて、いわゆる魔法を使う事ができるの」

「それには神器とよばれる…武器ね。自然の力を取り込んだ武器が必要な、この刀みたいに」

「ソラが言ってる技は、光燕^{こうえん}、^こといって、爆炎を光で眩く見えないようにして放つ技なの」

「いよいよファンタジーじみた事を言われ、もはや混乱はピークをむかえた。」

その事を察したようにラルは戸惑いながらも

「あ、大丈夫。いきなりは理解できないだろうから…ね^{なくさ}と慰めるように言った。」

その時だった。

下のほうでとても強大な爆発音がし、ガラガラと崩れ落ちるように2階の部屋が落っこちた。

「うわあああああああああ何だ!?!」

「この魔力は…、野獣、デキムスよ!」

何とか体を起こすと、目の前にはさっきの野獣がいた。

第三話 魔法吸収

俺は恐怖と驚きのあまり、声はおろか全身が震えあがった。

「…お前！さっきは…よくも！！」

野獣はゆづに2mを超えている、俺を見下し歯を噛みしめていた。

「殺じてやりでーが…俺が殺るべき相手はこいつだ…」

野獣はそう言っただけでラルのほうを見た、俺は腰がすくんでしまった。

野獣は全身を震えあがらせ、大きく口を開いた。

「お前…捕獲する…」

野獣の口からみるみると微かな光が放出され、丸まった玉になった。その玉を野獣は右手で持ち、軽くほほ笑んだ。

「そんなに圧縮した光の玉をどうする気？」

野獣はほくそ笑みこう言った。

「これ…放つと、広がって爆発する…半径100mは吹き飛ばす！…俺には効がない…！！」

すると驚いた事に、ラルは微笑した。

「…何笑つてる！お前…！終わりだ！！」

「だって、馬鹿正直に何をするか言ってくれろかなんて思わないじゃない？」

ラルはそう言っただけで、白刀・雪月花を自身の頭よりも高く翳した。

「おもしろいじゃない、やってみなさいよ」

野獣は完全にきれたようで、光の玉をすぐさまラルに向かって投げ

つけた。

ラルに向かうにつれ、その玉はみるみる大きくなり、光でたちまち何も見えなくなった。

「うわっ！」

眩しさのあまりとつさに手で自分の目を覆^{おお}った。

どうなったのかはわからないが、不思議と爆発音が聞こえる事もなかった。

しばらくして俺が見た景色は、何の変化もない、ただ光の玉が消えただけのようだった。

「……なぜだ！玉……消えだ！」

野獣が慌てふためいている姿を見て、光の玉は消え去ったと分かった。

「……さっき私と戦った時に、私の能力に気付かなかったのね」

ラルは目を閉じ、悠長に話し出した。

「私の能力は、光と炎を扱う事ができる……そして同系統の技の魔力を吸収する事ができるの」

つまりはドレインと言ったところか。

ラルは「相手の魔力でつくった光の玉を吸収した」ということだ。おそらく白刀・雪月花の能力でもあるのだろう、刀は輝いていた……光を吸収したかのように。

マジックドレイン

「魔法吸収……そんな高度な術を使える訳がねえ……！！」

野獣は目が血眼になっていた。

それほど珍しい能力……光と炎の技を吸収する事ができるというのはその系統の相手には無敵なのだろう。

「…私以外にこの能力が使える人は見たことがないわ」

ラルはそう言い、雪月花を逆手に持った。

刀は光のように輝き、ラルの黄色の髪と混じるようだった。

「私は‘それ’ができるから、今ここに居る事ができているのよ」
野獣の目の色が恐怖に変わったようだった。

まるで何かに脅えるかのように…。

「‘野獣’デキムス…もう逃げ場はないわ。お終いよ」

その言葉と同時に眩い光がはしった。

俺はとつさに頭を抱えて倒れこんだ。

「――光燕・特式陽の型！」

衝撃がはしった。

大地に、空中に…勿論全身にも。

俺は震えながらも目をあけた。

…予想通りと言っているほどの光景が目に入った。

‘家はおろかその周辺までもがほぼ完全に吹き飛んでいた’からだ。

「…最後の力をふりしぼって逃げたみたい」

ラルはそれから少し間をあけて

「流石に壊しすぎたわね…修復するわ」

その言葉に俺は驚きを隠せず、目が点になった。

「少しの魔力でなんでもなおすことができるの。…人間もね」
ラルはそう言って右手を天空に翳し、スツと息を吸い込んだ。

「リバース・ヴァース」

するとみるみる家や大地がなおっていった。
まるでCG映像が次々とつくられていくかのように。

「建造物や地面がなおせるのはまだ…その、わかるけど。人間をなおせるって——。？」

そう聞くとラルは微かに微笑み言った。

「人も…モノ」と一緒に、人の中にある魔力を使ってなおすの」

俺はあまりその言葉を理解できなかった。

「…そうね。一生分の魔力は決まっているの。その魔力をその人が使い果たす前に死んだのならなおせるのよ」

…俺は頭の中でその言葉を繰り返し、少し理解できた。

「死ぬ前の記憶ってのは…覚えたままなのか？」

「死ぬ数分前の事は忘れてしまうの——。だから今の出来事はこの辺の住民にはまったく知られていないわ」

その言葉を聞いて少し安心した。

…それは死因をしない。そう言っているのと同じだ。
人間にとってはそれが…少なくとも俺にとっては気が楽になる。

「とりあえず…色々な事件があったから、おそらく今の件だけを警察で重視して調べられる事もないだろうから。きっと問題はないわ」
ラルはそう言って俺の家の2階の階段をのぼっていった。

その時気付いた事は、うちの家族は誰も家にいなかったことだ。
わざわざハシゴで2階にのぼる必要はなかったようだ。

自室へ入ると、ラルは真剣な顔をした。

「私がここへ来た本来の目的は…地球を護るため。それは言ったよね？」

真面目な話をするんだと理解した俺は、黙って頷いた。

「…その地球を壊す為に動く組織もあれば、私たちのように護る為に動く組織もある」

「それをソラは知ってしまっている。地球の人には本来…知られちゃダメなんだけどね」

ラルは少し間をあけて、溜め息をついてから続きを話した。

「ソラは、知ってしまった、故にもう全宇宙での『問題』と無関係ではなくなったの」

「…これからソラに重大な話を話すから、しっかりと受けとめてね」

これも、ある意味、全ての始まり、だったのかもしれない。

第四話 二つに一つ

「重大な事？…地球を護る事じゃないのか？」

そう聞くと、ラルは少しうつむいた。

何から話せば迷っているといった表情：…というのだろうか。

「…そこから発展する話だけど、護る為には、攻める、事が必要なの」

俺が少し怪訝^{けげん}そうにしていると、ラルは俺の顔を見ずに言った。

「惑星ベルガモットの、魔王、の狙いは、今は地球だけ、みたいな」

「敵の進行が、地球だけ」と限られているのなら…何をすべきかは「二つ、あるの」

俺はまだ話を理解できず、頭を掻きむしられたような感じがしていた。

俺が続けてと言うと、ラルは少し間をあけてから話し出した。

「一つは、惑星ベルガモットを壊滅する。勿論、容易な事ではないわ」

「もう一つは、惑星ベルガモットからの進行を阻止することだけをする、…今の方法だけだね。これじゃラチがあかないわ」

つまりラルは、ブレイブハンターとして地球を護る為に来ている。しかしその方針には今は反対。といったところか。

「惑星ベルガモットを滅ぼせる事が全宇宙にとって、一番の平和になる…けど」

けど、とまで言うておいてラルはかなりの間をあけた。

「惑星ベルガモットの戦力は強大だから…今まで誰一人止める事ができなかった」

「滅ぼす事なんてとてもできない」と言っているように聞こえた。

…想像してみた。

「地球が支配されたらどうなるのか」を。

奴隷のような扱いをうけるのだろう、それこそ最も酷い扱いを…。

このまま黙っている訳にはいかないが、俺は無力だ。

そんな想いにふけっていると、ラルは話を進めた。

「止めないといけないの、なんとしても。だから…知ってしまった唯一の地球人」としてあなたにも力をかしてほしい」

その言葉に俺は驚愕した。

俺には何もできないというのに…。

「知ってしまった」からなのか？

裕也はまだこの話を知らないから、おそらく…俺だけかしらないのだろう。

「地球は平和よ。地球ほど自然に溢れている惑星は他にないわ」

「自然が多いということは、それだけ『魔力が溢れている』ということなの。それに触れて生活している地球人なら絶対に誰しも『能力』があるはず」

俺の返答を待っているのか、ラルはそこで話を終えた。

…まとめるとだ。

ラルは俺に『惑星ベルガモットを滅ぼす』事を手伝えと言っているんだ。

勿論他のブレイブハンターもいるだろうが、戦力不足なのだろう。それは話からも察せた。

俺は『それを手伝う』のか、現実を直視せず、逃げるのか、の二択を迫られている。

…人は一人でも多いほうがいい。おそらくは兵法の常識だろう。

手伝うとしたら、下手すれば死ぬだろう。

しかし、手伝わないでのほんと過ごして『逃げる』のは嫌だ。

なら『やってみせる』。それが俺の…『今の答え』だ。

「…無理に戦えとは言わない、ソラの思う通りでいいから——」

決意を決めたと同時にその言葉が聞こえた。

即答だ。

「俺は逃げたくないから！」

そう言うと、ラルは微笑み、手を差し伸べてくれた。

今日から決まった。

俺の役目は…、地球を護る、為に戦うことだ。

必ず護ってみせる。

家族を、友を。…自然の溢れる地球を、明るい未来を。

俺はその時知らなかった。

いや…知ろうともしていなかった。

俺には戦うほどの力はなく、力をつけるためには何が必要なのかを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0599j/>

碧眼のソラ

2011年10月6日09時24分発行